

万次郎人生の概観⑮「薩摩・開成所教授に赴任」

(1)薩摩藩立開成所教授として薩摩に出向・赴任

元治元年(1864)5月、薩摩藩は中濱万次郎を蒸気船運用術の教授として3年間招聘する出向の願出を幕府に提出した。幕府はこれを聞き届け、万次郎は薩摩藩が開成所教授に就任し、薩摩へ赴任することになった。開成所はこの年(1840)6月に開設された陸海軍の士官学校ともいべき軍事教育養成のための学校であった。ここで万次郎は航海・測量・造船等の諸術や英語を担当することになった。

また、開成所教授として指導する傍ら、英語や操船に長けた万次郎は、薩摩藩主の命で藩船購入の交渉に当たった。大久保利通が藩船や武器弾薬購入の実務担当者である伊地知壮之丞に宛てた手紙に伊地知等と船舶購入に長崎で活躍する万次郎のことが記されている。

慶応2年(1866)正月、薩摩藩立開成所教授に着任して1年7か月、薩摩藩主の許可を得て長期の休暇をもらい故郷中浜浦に帰省した。実家には兄姉がいたので手狭だったため、中浜浦の知識人であり、文武に秀で万次郎が信頼していた先輩・池道之助の屋敷に万次郎は滞在した。実家の裏に藁葺きの母の隠居所を万次郎は建てた。このとき母は74歳と当時の感覚からいけばかなりの高齢であったが頗る壮健であった。万次郎は3月末まで約3か月故郷でゆっくりと過ごした。

(2)薩摩藩立開成所の長期休暇中に土佐藩校「開成館」で教鞭

また、土佐藩船購入のために後藤象二郎等と長崎へ

高知城下に土佐藩の設立した開成館という藩校が立ち上がり、万次郎はその立ち上げのためしばらくの間、期間的に教授をしてもらえないかと土佐藩主より要請された。万次郎は郷土の先輩・池道之助を口説き落とし、自分の側近として高知城下へ随行させた。道之助には妻や子もあり、恐らくは家族を残して後ろ髪を引かれる思いで万次郎に追いついていったに違いない。英語の内弟子・立花鼎之進(たちばな・ていのしん)、家来・与総次(よそうじ)を従え、万次郎を含め総勢4人で徒歩高知城下をめざした(1866年3月25日)。この詳細はいわゆる『池道之助日記』の「思出艸」に記されている。

中浜峠を下り、渡浜(小浜、清水港口の砂浜)で別れの宴会を開き、渡し舟に乗り、本清水(現在の土佐清水市元町)を経て以布利、大岐へ。伊豆田峠を越えて初崎から四万十川を越え、入野、浮鞭、佐賀、窪川。窪川では大雨で数日足留めを食らうが、久礼坂から久礼浦へ。そこから海路で須崎。須崎から高岡を経て、仁淀川を渡り朝倉へ。鏡川を渡り高知城下の紺屋町中村屋龍助方を宿所とした(1866年3月30日)。

(3)土佐藩船購入のため後藤象二郎等と池道之助を伴い長崎へ

万次郎は、土佐藩校「開成館」で3か月余り航海術・測量術・捕鯨術を教授した。そろそろ赴任契約中の薩摩藩開成所のことも気になり始めていた。また、「開成館」もようやくここにきて軌道に乗ってきた。そんなとき、土佐藩の参政であった後藤象二郎から藩船を購入するため長崎へ同行してもらいたいとの要請があった。既に薩摩藩での藩船購入で成果を上げていた万次郎に白羽の矢が立った。万次郎は、内弟子・立花鼎之進を開成館に置き、池道之助を従えて後藤象二郎らとともに長崎に向かった(1866年7月7日)。

途中、宇和島藩に立ち寄り、藩主から厚遇を受け、7月25日一行は長崎に到着した。長崎に着くと万次郎は、持ち前の人脈を活かし、レーマン、フレンチ、グラバー等の商館を頻繁に訪ね、様々な商談を重ねた。しかし、長崎には土佐藩船に適当な船舶が無いことが分かり、上海までそれを探しに行くことになる。結果的に上海には2回行き来することとなる。

1回目は、池道之助は同行せず、後藤象二郎と高橋勝蔵(用人勘定方)ら5人が万次郎と上海まで航行。2回目は、後藤象二郎は行かず、池道之助等3名が万次郎に同行して上海まで航行した。結果、新造船1隻を含む5隻の藩船を購入することができた。

慶応2年(1866)12月12日、万次郎は藩船購入の大役を果たし、海路長崎から横浜へ。自宅の江戸芝新銭座(えどしばしんせんざ)の江川邸内の自宅に帰った。家族と正月を迎え、翌(1867)2月26日、家来与総次とともに自宅を出て、大坂(大阪)まで陸路で進んだ。大坂から長崎へは海路で移動し、弟子立花鼎之進とは長崎で合流した。そこから便船を得て鹿児島に着き、4月中旬から11月初旬頃まで再び薩摩藩立開成所で教鞭をとった。慶応3年11月初めにそこでの任期が満了し、長崎経由で11月末に江戸の自宅に戻った。江戸の自宅に帰る途中、長崎へ万次郎は10日間ほど滞在した。万次郎と長崎で別れ、長崎の土佐商会で岩崎弥太郎や坂本龍馬に従い仕事をしてきた池道之助と再会した。そこで万次郎は、道之助に故郷中浜浦に帰省したときに、母(万次郎の)に渡してほしいと金十両を預けた。

この年(1867)11月7日大政奉還がなされ、264年の長きにわたり維持されてきた幕藩体制が瓦解し、江戸幕府が終了し、時代は明治へと続く。【次号へ】